

中国の小学校国語教科書『語文』の中の文学作品 ——中国文学と外国文学の関係を中心に

西 川 真 子

はじめに

- I 中国における義務教育語文課程の概要と教育目標
- II 『語文』の中の文学作品と読書能力の育成
- III 『語文』の中の中国文学
- IV 『語文』の中の外国文学

おわりに

はじめに

中国の義務教育課程における国語科目「語文」は、言語と文章に対する理解力を育むと同時に、国民として共有すべき基礎知識を学ぶための科目と考えられている。語文課程の中で教えられる内容は、中国語の文字と言葉、文学的価値の高い作品と国民にとって必要とされる情報知識を説明する叙述文が主体となるが、中国社会が世界の多様な国家地域との関係を強化するにつれて、国民が共有すべき知識と言う観点から見ても、国家と民族を問わず人類全体の財産とみなされる事項が増えていく。

筆者はこれまで、中国の義務教育課程語文科目の教科書について、考察を重ねてきた。その中で、中国の義務教育課程における語文科目の教科書は、言葉と文字、文学、歴史、地理、愛国主義の精神、人間と自然の関係、科学への関心等を主題とする教材を單元ごとに分類し構成されている事、

異なる主題を持つ単元が相互に関係し全体を構成している事を確認してきた。¹

この研究の過程で筆者は、多様な教材の中に世界各国の文学作品が含まれることに注目するに至った。そこで本稿では中国の小学校で使用されている語文教科書の中で、外国文学を主題とする教材が如何なる位置を占めるか、外国文学を学ぶ理由は何か、また外国文学を学ぶ教材としてどのような作品が取り上げられているのかを明らかにしたい。

なお、本稿の考察に当たっては、2001年から2006年にかけて順次、全国中小学校教材審定委員会の審査を通過し初版が発行された後、全国の6割以上の小学校で使用されている、人民教育出版社刊『義務教育課程標準実験教科書 語文』(以下、『語文』)一～六年級各上下冊、合計12冊を主な資料とする。²

I 中国における義務教育語文課程の概要と教育目標

現在、中国の義務教育語文課程は、中華人民共和国教育部が制定した「義務教育語文課程標準(2011年版)」(以下、語文課程標準)によって実施されている。その中で義務教育課程の語文科目に対し「語文課程標準」は以下のように定義する。

語文課程は言語と文字の運用を学ぶ総合的かつ実践的な課程である。義務教育段階の語文課程は、自国の言語と文字を用いて交流を図るための初歩的な方法を学び、古今中外の優れた文化を吸収し、思想と文化を高めるべく修養し、自らの精神的成長を促すべく、学生を導くことを旨とする。実用性と人文性を統合することは、語文課程の基本的特色である。³

これによると、語文課程は言語と文字の運用を習得するための実用性の

高い科目であると同時に、国内外の優れた思想と文化を広範囲に習得するための科目であると定義されている。では、その目標を達成するために、語文課程においては、どのような教科書を使用するのか。これについて「語文課程標準」は、その第三部(三)「教材編集への提言」第三条に「教材は中華民族の優秀な文化と革命の伝統を継承し発展させることを重んじ、学生の民族的自尊心と愛国主義的感情の強化に資する」⁴と述べる。実際に語文科目の教科書の中には、自国の優れた文学作品、自国の建設と発展に貢献した先人、中国を代表する名勝や歴史遺産を紹介する教材が様々な視点から選ばれている。

だが、世界が益々緊密に相互関係を強めようとしている今、中国が国際社会で果たす役割も重要かつ複雑になっている。この事態に対応するために、中国の国民には国内外の多様な文化を知ることが求められ、語文課程の教育内容にもこの事情は反映されている。そこで「語文課程標準」第三部(三)「教材編集への提言」第二条は「教材は時代の特色と現代意識を体現し、現実を見据え、人類、自然に関心を注ぎ、多様な文化を理解して敬意を表し、学生が正しい世界観、人生観、価値観を築くのを促さねばならない。」⁵と記す。

では、多様な文化を理解するという目標に沿い、時代の特色と現代の意識を体現する教材とは、具体的にどのような内容から成り立っているのか。文化の多様性が進む社会に適応する教科書には、国内外の様々な価値観を反映する教材を含まれなければならないが、その要件を満たすために、中国の語文科目の教科書には外国の文学作品が教材として取り入れられている。よって本稿では、中国の語文科目の教科書に外国文学の作品がどのような形で教材として載録されているのか、現在使用されている中国の語文教科書を資料に、以下に考察したい。

Ⅱ 『語文』の中の文学作品と読書能力の育成

中国の義務教育課程語文科目の目標は、中国の公民として必要な中国語の理解力と国民が共有すべき最低限度の知識を身につけることにある。そのため、語文の教科書には社会参加に必要な語彙と知識を習得するための教材が取り上げられるとともに、社会が共有すべき文化的財産として優れた文学作品に触れ、読書の習慣を養うための教材が載録されている。

教師用教学書によれば、小学『語文』全12冊の中には、五年上第一単元「読書の喜び」並びに五年下第五単元「中国古典文学の名著」を受けて、その延長上に六年下第四単元に「外国文学」を主題とする単元が設けられている。⁶ その中で『語文』五年上第一単元「読書の喜び」には、第1課「窃读记」（秘密の立ち読み）⁷、第2課「小苗与大树的对话」（小さな苗と大きな木の対話）⁸、第3課「走遍天下书为伴侣」（世界の果てまで本が道づれ）⁹、第4課「我的长生果」（わたしの命の源）¹⁰が取り上げられている。第1課と第3課は精読教材、第2課と4課は略読教材であるが、これらはいずれも、読書には何ものにも替え難い価値が有ることを説く。精読教材の中で、第1課「窃读记」は民国時代の作家林海音の作品である。本文では、一人の少女が毎日放課後になると書店に急ぎ、店の主人に見咎められないように注意しながら秘かに本を立ち読みする様子を描き、本を読みふける間に足が痺れ空腹に襲われても、少女にとって読書は生きる糧そのものだったと記す。

同じく精読教材の第3課「走遍天下书为伴侣」は、イギリスの作家ジョアン・アイケン（Joan Aiken）の文章“Take a book wherever you go”を原作とする。この教材も読書が人間にとってかけがえの無い体験となることを説く。本文は、世界一周の旅に出る時に何か一つだけ携えたとしたら、それは何かという問いを発し、自分は迷うことなく本を選ぶと述べる。長い旅の中では、たった一冊の本を何百回も読むことになるが、それは何も不都合とはならない。「あなたは、以前出会った友人にはもう会いたくない

と思うだろうか？ 家の中の使い慣れた愛用品を棄てて顧みないというような事があるだろうか？ 既に百回会った友人でも、百一回目に会った時に、『君にそんなところが有るなんて、思いもしなかったよ！』と言うかもしれない。』¹¹と説く。

これら二つの教材は、それぞれ「どんな代償を払っても読書の機会を得る」、「一冊の本を何度でも繰り返し読む」という、読書に対する姿勢を示す。

このように、読書の習慣を養うことは中国の義務教育語文課程の学習目標の一つとされている。その中でも、自国の文学作品を読むことは重要な位置を占める。よって、『語文』各冊には教材として様々な形で中国文学の作品が載録されている。以下にその実例を確認したい。

Ⅲ 『語文』の中の中国文学

(1) 古詩詞・寓言・神話伝説

本稿では、『語文』の中に外国文学が如何なる形で取り上げられているのかを考察するが、その前提として『語文』所収の中国文学の作品を確認する。

語文課程の小学一年次では、拼音と漢字の導入学習を経た後、単元ごとに与えられた主題に沿って教材が展開する。その中で、中国文学の作品として最初に登場するのは、『語文』一年上第二単元第6課「静夜思」(静夜思)¹²である。この作品は中国唐代の詩人李白が31歳の時、遠く故郷を離れた地において、空に高くかかる月を眼にして湧き起こった望郷の念を詠う作品である。だが、月の光を見上げ遥かな故郷に想いを馳せるというこの詩の内容は、小学一年の児童が自然に共感を覚えるものとは言い難い。また、作品の中には「静」「疑」「望」などの漢字を含み、小学校入学直後の児童には難度の高い教材である。それにもかかわらず、この教材は、国民が周知すべき名作と位置づけられ、小学一年の暗誦課題とされている。

「静夜思」につづく第7課「小小的船」(小さな船)¹³は、「静夜思」と対照

的には小学校入学直後の子どものために書かれた児童詩で、原作者の葉聖陶は民国時期から中華人民共和国成立後も、中国の語文教育の近代化に寄与した教育家、作家である。同課の後には、第8課「阳光」(陽光)¹⁴、第9課「影子」(影)¹⁵と、いずれも月、星、太陽とその影をモチーフに宇宙科学に対する児童の関心を導き出す教材がまとめられ、第6課「静夜思」は、月をモチーフにする作品として、これらの巻頭に掲げられている。

『語文』一年上で学ぶ中国古典文学の作品は「静夜思」だけだが、その後『語文』では、学年を追って各冊に「古诗词」(古詩詞)と題する教材が割り当てられている。その中で主要な作品を数えると、李白の詩は合計7作、杜甫と蘇軾は各4作、王維、杜牧、白居易、王安石の作品は各3作となる。これらの作品は、それぞれ同じ単元内の他の教材と連携しながら、教材構成の一部を担っている。

たとえば『語文』四年下第一単元は「走遍千山万水」(山河をめぐる)を主題とし、その第1課「古诗词」には李白「独坐敬亭山」(独坐敬亭山)、劉禹錫「望洞庭」(望洞庭)、白居易「忆江南」(憶江南)の三首が配され、この単元の内容を象徴するとともに、これつづく第2課「桂林山水」、第3課「记金华的双龙洞」(金華の双龍洞)、第4課「七月的天山」(七月の天山)を引き出す役割を担っている。

詩詞に次いで、中国の古典文学に関わる教材には、『孟子』『韓非子』『莊子』など中国古代の思想書の中から、人間の行動と人生に対する処し方を象徴的に表わす故事を現代文で書き表した、「寓言」が登場する。

現在使用されている人民教育出版社刊『語文』の中で「寓言」に属する教材は、二年上第13課「坐井观天」(井戸の中から天を観る)、同第14課「我要的是葫芦」(欲しいのは瓢箪)、二年下第七単元第27課「寓言两则」所収の「揠苗助长」(助長)、「守株待兔守株」(守株)、三年下第三単元第9課「寓言两则」所収の「亡羊補牢」(羊を失った後に牢を繕う)、「南轅北轍」(南轅北轍)、四年下第八単元第29課「寓言两则」所収の「纪昌学射」(紀昌学射)、「扁鹊治病」(扁鵲治病)が配されている。

この中で「紀昌学射」と「扁鵲治病」は、四年下第八単元「物語の世界」の中に第30課「文成公主进藏」（文成公主、西藏へ）、第31課「普罗米修斯」（プロメテウス）、第32課「漁夫的故事」（漁師の話）とともに収められ、本稿が考察する「語文教科書の中の文学作品」とも関わりを持つ。

「紀昌学射」は、中国の古典『列子』（湯問篇）の中の一節に基づく教材である。文中では、紀昌という男が弓の技を極めるために、瞬きをせず蚕のように小さな対象物も大きくはっきりと見えるようになるまで修練を積んだ後、ようやく弓矢を手にして達人となったとされ、何事も名人となるには土台を築かねばならないことを説く。つづく「扁鵲治病」は戦国時代に活躍したと言われる伝説上の名医扁鵲の物語である。本文中、扁鵲は蔡の桓公に対し体内で進行している病の治療を勧めたが、桓公には自分の身体に不調を感じられず取り合わなかった。後に桓公の病状が深刻になった時、扁鵲は既に他国に去り手遅れとなった。この教材は、扁鵲の医師としての真摯な態度を理解するとともに、信頼できる者の助言には耳を傾けるべきだと説く。¹⁶

「紀昌学射」並びに「扁鵲治病」とともに『語文』四年下第八単元「物語の世界」に収められている第30課「文成公主进藏」は、唐朝の皇女文成公主が、唐朝と吐蕃の関係強化の為に吐蕃国王ソンサンガンポに嫁いだ故事に基づく内容で、文成公主を知恵と勇気を以って吐蕃の発展と唐朝との友好に尽くした人物として描く。これらの教材はいずれも、機智と勇気に富み、信念を貫く人物を中心に据える。さらに第31課「普罗米修斯」もまた、自分の信じる正義のために権力に屈しない姿を描き、第32課「漁夫的故事」は、臨機応変な知恵によって危機を乗り越える人物像が示されている。

詩詞と寓言に基づく教材は、本文中の一節或いは本文全文を暗誦筆記することを目標とする。文学作品に由来するこれらの作品の中の詩句や言い回しは現在も中国社会で広く日常的に引用され、中国語の中の重要な語彙となっている。こうした状況に呼応し、小学校の語文課程においても、中

国文学に典故をもつ豊かな語彙を習得することが重視されている。

「古詩詞」「寓言」と並び、「神話と伝説」もまた、『語文』の教材に取り入れられている。『語文』三年下第八単元「神話と伝説」には、第29課「古詩詞兩首」所収の林杰「乞巧」(乞巧)並びに李商隱「嫦娥」(嫦娥)、第30課「西門豹」(西門豹)、第31課「女媧補天」(女媧、天を補う)、第32課「夸父追日」(夸父、日を追う)が並ぶ。これらはいずれも中国の神話伝説を主題とし、中国文化を理解する上でも重要な要素となる。

(2) 『語文』五年下第五単元「中国古典名著の旅」

現在実施されている中国の義務教育語文課程では、中国の古典文学に関し上述の教材を学んだ後に、『語文』五年下第五単元「中国古典名著の旅」が配され、第18課「将相和」(将相和)、第19課「草船借箭」(草船借箭)、第20課「景阳冈」(景陽岡)、第21課「猴王出世」(猴王の誕生)が取り上げられている。『語文』五年下冊にはこの第五単元以外にも第5課「古詩詞三首」、第10課「楊氏之子」(楊氏の子)、第11課「晏子使楚」(晏子、楚に使いす)、さらに第22課に『儒林外史』から抄出した「臨死前的严監生」(臨終間際の嚴監生)、同じく『紅樓夢』から抄出した「“凤辣子”初見林黛玉」(王熙鳳、初めて林黛玉に会う)が収められ、全体を通して中国の古典文学に比重を置く構成になっており、同冊の中で中国を代表する五つの古典小説を相次いで学ぶことになる。よって以下に、『語文』五年下第五単元の内容を確認する。

* 『語文』五年下冊所収の中国古典文学に関する教材。

(括弧内は、教材の原典)

五年下第5課 「古詩詞三首」(「牧童」「舟過安仁」「清平樂・村居」)

五年下第10課 「楊氏之子」(『世說新語』)

五年下第11課 「晏子使楚」(『晏子春秋』)

- 五年下第18課 「将相和」(『史記』)
- 五年下第19課 「草船借箭」(『三国志演義』)
- 五年下第20課 「景阳冈」(『水滸伝』)
- 五年下第21課 「猴王出世」(『西遊記』)
- 五年下第22課 「人物描写一組」所収「臨死前の严監生」(『儒林外史』)並びに「“凤辣子” 初見林黛玉」(『紅樓夢』)

『語文』五年下冊第五单元「中国古典名著の旅」は、中国でよく知られた古典文学から、必須教材として第18課「将相和」、第19課「草船借箭」、略読教材に第20課「景阳冈」、第21課「猴王出世」を載録する。これらはいずれも時代を越えて親まれてきた中国古典作品の名著であるが、『語文』ではこれを小学生に理解できる現代文に改めて教材としている。

これらの教材を学習するに当たり、教師用教学書は、「中国の古典文学の中から名著を読むことは、語文能力の向上はもとより、智慧を益し素養を高める上で大きな意味を持つ」と述べる。¹⁷ また、教材の選定に当たっては、物語の面白さと躍動感あふれる人物表現を児童が鑑賞できるか否かに重点が置かれている。同单元に取り上げられた4つの教材はいずれも中国の文学史上に特筆される作品であるが、授業を通じて作品の存在を知らしめ、古典文学に対する関心を引き出すことを目的とし、それぞれ原文の一部を取り上げ教材として改編されている。

第18課「将相和」は司馬遷『史記』所収の「廉頗藺相如列伝」を原作とし、作品中には「完璧帰趙」「渾池之会」「負荊請罪」の語で知られる、躍動感に溢れた故事を含む。本文では趙国の将軍廉頗と上相文官藺相如が、敵対する秦国との間に生じた外交関係の危機を乗り越えるために信頼関係を確立し、趙国の存続という共通の目標に寄与する経緯を描く。文中には、名宝「和氏璧」を秦国から守るため、藺相如が秦王と命がけの駆け引きを展開する場面が有り、藺相如は秦王との攻防を勝ち抜き、無事に和氏璧を

趙国に持ち帰った。これによって面目を失った秦国は数年後趙王と渾池で会見し、辱めを与えようとしたが再び藺相如がこの危機を救った。藺相如はこれらの功績により廉頗を凌ぐ地位を得たため、廉頗はこれを憤り藺相如を見たら必ずこれを辱めると公言してはばからなかった。しかし藺相如が、「趙国は、武の廉頗と文の藺相如が双璧として並び立ってこそ秦に怖れられる存在である」と説くと、廉頗は自分の狭量を恥じ背に荊を負い藺相如に詫びた。この教材の本文は、廉頗と藺相如は「強い絆で結ばれ、趙国を守る為に力を合わせた」という文で締めくくられる。教師用教学書では、この教材を学習する目的を、「完璧帰趙」「渾池之会」「負荊請罪」という三つの故事を通じて廉頗と藺相如が身を以って示した愛国思想を知ることにあるとする。¹⁸

つづく第19課「草船借箭」は明末元初に成立した、羅貫中『三国演義』の中の一節で、呉の武将周瑜と知将諸葛亮が知略を競う場面を描く。登場人物の一人、周瑜はかねてから諸葛亮の才能を快く思わなかったが、おりしも曹操軍との一戦を前に、諸葛亮は周瑜に対し「三日で十万本の矢を用意してみせる、もし果たせなければ潔く処罰を受ける」と公言するところとなった。周瑜はこれを諸葛亮を追い落とす好機とみて、諸葛亮の動向を注視した。三日間で十万本の矢を作るなど不可能と思われたが、諸葛亮は平然とした口調で、「船二十艘を用意し、船ごとに三十名の兵士を乗船させ、船は青い幔幕で覆い、さらにその内側に藁束を並べよ」と告げた。三日目、二十艘の船は準備を整え漕ぎ出した。果して水上は深い霧に包まれていた。諸葛亮の船が漕ぎ出してくると、これに敵対する曹操軍は「霧が深く視界が悪い。妄りに軍を進めるな。弓矢を射て敵を防げ」と命じた。曹操は一万人の射手をそろえ、江上の諸葛亮の船をめがけて矢を射掛けた。夜が明ける頃には、諸葛亮の船には十万を越える矢が突き刺さっていた。諸葛亮は成果に満足し、悠々と引き返していった。曹操は諸葛亮の巧妙な作戦に気がついた時は既に手遅れで、諸葛亮に難題を吹き掛け窮地に陥れようとした周瑜もまた、諸葛亮の戦術に言葉を失った。

この教材の学習目標の一つには、諸葛亮の人並みはずれた知略を知り、自分の言葉でこの話を語ることが掲げられている。また併せて、授業の中で諸葛亮、周瑜など、この教材の登場人物に対する描写表現を鑑賞することを提言している。¹⁹

次に略読教材として、第20課「景陽岡」（景陽岡）を学ぶ。この教材もまた、中国のを代表する古典小説の一つで、元末明初に作者施耐庵によって書かれたとされる『水滸伝』を原作とする。作品には、北宋末期徽宗皇帝の時代、不正官僚に抵抗し権力社会を逸脱しながらも、義侠心に満ちた豪傑百八人が梁山泊に集結し闘いを挑む姿が描かれる。

この教材に取り上げられているのは『水滸伝』第二十三回から、物語の主要人物の一人である武松が故郷への旅の途中、偶然立ち寄った居酒屋の主人とやり取りするうちに、景陽岡と呼ばれる山中に独りで入ることになり、同地に出没する虎を素手で退治する場面で、「武将打虎」の語と共に名高い一節である。

教師用教学書は、この教材を「武松が居酒屋で大いに飲み食いした後、酒の勢いを借りて景陽岡に脚を踏み入れ、素手で虎と格闘した経緯を叙述し、武松の豪放機敏で武勇に優れた英雄像を表現している」²⁰と説く。この教材の学習目標は「武松の豪放屈強で勇氣と機智に溢れた英雄像を理解すること」²¹とされるが、本文に描かれる英雄武松とはどのような人間なのか。

まず本文の冒頭、武松は居酒屋で主人が諫めるのも聞かず強い酒を十八杯も煽り肉を頬張った。得心するまで飲み食いした後、武松は人を襲う虎が出没するため独りで登るのは禁じられている景陽岡に踏み入ろうとする。居酒屋の主人はこれを止めようとするが、武松は「虎にかこつけて自分を店に引き止め、夜になったら俺の金品を盗む魂胆か」²²と詰め寄り相手の怒りを買ってしまう。こうした経緯の後、武松は山中に入り、「虎の出没により独りで入山することを禁止する」という役所の指示見て漸く事態を理解したが、今さら引き返して笑い者になるわけにはいかないと決意して

前進すると、果たして獍猛な虎が現れた。武松は虎を目の当たりにすると酒の酔いを忘れ素早い身のこなしで虎と格闘し、終には虎を殴り殺して絶命させた。

教科書及び教師用教学書は武松を「英雄」と称するが、武松は所謂「正義の為に闘う英雄」ではない。前述したように、武松は虎との格闘に先立って好き放題に飲食し、酔って独りで山に入るのは危険だと忠告した店の主人に「虎の話をお口に自分を騙すつもりではないか」と言い放ち相手を怒らせている。

その後、武松は山中に入り、虎への注意を促す張り紙を見て、ようやく虎の話が真実だと知るが、もはや引き換えて笑い者になる訳にはいかないと歩を進めた。よって、この教材の中で武松が英雄である所以は、危険を忠告する助言に耳を貸さず自ら窮地に追い込まれたが、一旦口にした言葉を翻し面目を失う訳にはいかないと、決死の想いで虎との死闘を制した点にある。

危険を顧みない主人公の冒険譚は、次の第21課「猴王出世」(猴王の誕生)²³にも受け継がれる。「猴王出世」は略読教材で、題材は中国の古典小説『西遊記』の巻頭より、物語の主人公孫悟空が誕生する場面が取り上げられている。

『西遊記』もまた、中国を代表する古典小説の一つである。『西遊記』が章回小説として現在の形にまとめられたのは明代であるが、『西遊記』の原形は唐の高僧玄奘(602-664)²⁴による仏典を求める大旅行の記録として646年に書かれた『大唐西域記』と、玄奘没後の688年に玄奘の弟子慧立によって書かれた『大唐慈恩寺三蔵法師伝』に求められる。後世、玄奘三蔵の数奇な旅行譚には庶民の関心が集まり、講談など語り物文芸の人気演目となり、南宋時代にはその代表的テキストとして『大唐三蔵取経詞話』が出版された。それ以降もこの物語は改編が進み、玄奘三蔵に代わって主人公に据えられた孫悟空が猪八戒、沙悟浄と共に三蔵を助け妖怪・化身と闘う空想世界の冒険譚へと変貌を遂げ、現在の『西遊記』と呼ばれる作品と

なった。

『西遊記』の中で、最も勇敢で魅力溢れる存在は孫悟空である。『語文』五年下第21課「猴王出世」には、『西遊記』全百回の中の第一回、物語の主人公となる孫悟空が、谷川の水源を突き止めようと冒険を挑み、水簾洞という滝壺をくぐって別天地を発見したことにより猿の群れの信望を集め美猿王となる一節が取り上げられている。

このように、『語文』の中で学ぶ中国の古典文学は、まず小学校入学直後から、唐詩をはじめ中国歴代の名詩を暗唱することに始まり、現代中国語の中で頻繁に日常会話に上る寓言、神話伝説に由来する教材を取り入れる。その中では、「揠苗助長」「守株待兔」等、愚かな人間像を反面教師として学ぶとともに、「西门豹」「紀昌学射」「扁鵲治病」「晏子使楚」など信念を貫く模範的人物像を示す作品が多くを占める。多様な教材の中で中国古典文学に親しむ機会を得た後、『語文』五年下第五单元では、中国を代表する古典作品に基づく四つの教材が選ばれている。精読教材である「将相和」と「草船借箭」は、機智と洞察力に富み難題を解決する人物を中心に据えた物語である。この中で特に「将相和」は、敵の攻撃から自国を守るために無用な争いを封じた藺相如と廉頗を真の勇者と讃える。これに対して「景阳冈」と「猴王出世」は、危険を顧みず未知の世界に挑む勇者の冒険譚に分類される。つまり同单元は中国の古典文学に親しみつつ、洞察力と知力に満ちた知将と未知の世界へと果敢に前進する勇者を讃える作品が選択されていると言える。

(3) 中国現代文学

『語文』では、現代文学の分野においても国民が知的財産として共有すべき作品が選ばれている。

現代中国の文学者の中で最も重視されているのは魯迅である。それは、『語文』全12冊の中で、唯一魯迅だけが、単独で一つの单元を用い「偉大な作家魯迅」という主題で教材が集められていることにも表われている。

すなわち、『語文』六年上第五単元は魯迅を主題とし四つの関連教材を集める。²⁵ただし、魯迅の作品は小学生には難解で、同単元ではただ一つ、魯迅の小説「故郷」から一部分を抄出し「少年閩土」と題する教材が収められているだけである。他の三つの教材は、魯迅に敬意を表わす他の作家等の作品である。つまり、この単元の目標は、魯迅の作品を直接鑑賞するのではなく、中国現代文学史の中で特別な位置にある、魯迅という作家を知ることにある。

『語文』の中で、教材として載録された作品数が最も多い作家は葉聖陶と老舎である。前述のように葉聖陶は、中華民国時期から中国の語文教育の近代化を担った第一人者で、中華人民共和国成立後は人民教育出版社長も務めた。『語文』の中で葉聖陶の最初の作品は、『語文』一年上で前述の李白作「静夜思」の後を受けて登場する、第7課「小小的船」²⁶である。この教材は『語文』所収の現代文学の作品としても最初の教材に当たる。その後、葉聖陶の作品は三年下第3課「荷花」(蓮の花)²⁷、四年上第6課「爬山虎の脚」(蔦の蔓)²⁸、四年下第3課「记金华的双龙洞」(金華の双龍洞)²⁹が順次取り上げられている。これらは、それぞれの学年の学習進度に沿った小学語文課程の教材として長年親しまれてきた。

老舎の作品は、葉聖陶の後を継ぐ形で登場し、四年上第四単元「動物」所収の第15課「猫」(猫)、同第16課「母鸡」(雌鶏)³⁰、次いで五年下第一単元「中国西部」所収の第1課「草原」(草原)³¹及び六年下第二単元「中華民族の民俗と気風」所収の第6課「北京的春节」(北京の春節)³²は、それぞれ蒙古草原と北京の春節の風景を描いた紀行文として取り上げられている。

魯迅、葉聖陶、老舎の他に、『語文』には中国現代文学史上に著名な作家として、巴金、蕭紅、林海音、許地山、朱自清の作品が取り上げられている。これらの教材を学習順に並べると、以下ようになる。

* 『語文』所収の中国現代文学の主要作品。

(括弧内は日本語訳と原作者)

一年上第7課「小小的船」(小さな船 葉聖陶)

三年下第3課「荷花」(蓮の花 葉聖陶)

四年上第3課「鳥的天堂」(鳥の樂園 巴金)

第4課「火烧云」(夕焼け雲 蕭紅)

第6課「爬山虎的脚」(蔦の蔓 葉聖陶)

第15課「猫」(猫 老舍)

第16課「母鸡」(雌鶏 老舍)

四年下第3課「记金华的双龙洞」(金華の双龍洞 葉聖陶)

五年上第1課「窃读记」(秘密の立ち読み 林海音)

第15課「落花生」(落花生 許地山)

五年下第1課「草原」(草原 老舍)

第6課「冬陽・童年・駱駝隊」

(冬の陽・幼年時代・駱駝隊 林海音)

第7課「祖父的园子」(祖父の庭 蕭紅)

六年上第17課「少年闰土」(少年閏土 魯迅)

六年下第2課「匆匆」(忽忽 朱自清)

第6課「北京的春节」(北京の春節 老舍)

既に述べたように魯迅は六年上第五単元に関連作品四つをまとめて一つの単元をなし、葉聖陶と老舍は、一人の作家としては最多の四作品ずつが取り上げられている。これに次いで蕭紅と林海音は各二作品、巴金、許地山、朱自清の作品が各一作ずつ載録されている。

蕭紅(1911~1942)と林海音(1918~2001)は共に同世代の女性作家であるが、ここではいずれも作者の幼年時代の体験に基づく作品が教材となっている。まず蕭紅³³原作「火烧云」(夕焼け雲)は『語文』四年上第一単元「大自然の魅力」に収められている。同単元は題目どおり、大自然の魅力を表現する作品を集め、「火烧云」もその一つである。蕭紅の二作目、

五年下第二単元第7課「祖父的園子」(祖父の庭)は発表当時魯迅等から高い評価を受けた、蕭紅の代表作「呼蘭河伝」(呼蘭河伝)の中の一節である。一方、林海音³⁴(1918~2001)は日本で生まれた後、台湾での生活を経て幼児期に両親とともに北京に移り住み長じて北京で記者として活動した。ここに教材として取り上げられている二つの作品は北京で過ごした作者の少女時代の体験に基づいている。特に「冬陽・童年・駱駝隊」は林海音の代表作『城南旧事』の序文から抄録されている。蕭紅と林海音はそれぞれ対照的な生涯を送った作家であるが、ここではともに、少女時代の生活、家族との思い出を題材にした作品が取り上げられている。

『語文』四年上第一単元には、蕭紅「火烧云」と並んで巴金「鳥の天堂」(鳥の樂園)³⁵が収められている。作者の巴金(1904~2005)は、1920年代末から多数の作品を発表し魯迅からも高い評価を受けた。また抗日戦争中は救国運動に尽力した愛国者として評価されている。教師用教学書によれば、「鳥の天堂」は広東省新会市郊外にある樹齢五百年を越えるガジュマルの大木を指す呼称で、巴金がこの地を訪れた際に耳にした「鳥の樂園」という美名に引かれて作品を書いたとされる。本文は少年たちが小船で川に漕ぎ出し、川辺にそびえるこの大木が、その名のとおり鳥たちの棲家となっていることを知る様を描いている。つまり、この作品は大自然の魅力を表現すると共に、自然の力を発見する少年の物語という側面も併せ持っている。少年たちが自然の姿を知る物語としては、四年下第3課に登場する葉聖陶作「記金華的双龍洞」も同じ系列の作品である。

これに対して、『語文』五年上第4単元「生活」第15課「落花生」(落花生)は許地山の作品を原作とする。許地山(1893~1941)は台湾出身、抗日戦争勃発後は巴金と同じく愛国的左翼作家として活動した経歴をもつ。「落花生」は自宅の菜園で育てた落花生を母親が調理し、両親と幼い子供たちが語り合いながら味合う姿を描く。作品中には質素な中にも毅然とした精神で生きる家族の姿が表現され、父親が子供たちに、落花生のように目立たずとも社会に役立つ存在になる意義を説く、教育的側面が強い作品で

ある。

古典文学を基に作られた教材と異なり、現代文学から取り上げられた教材は、身近な自然現象や動植物の生態、日常生活の中で心に浮かぶ感慨、成長過程にある子どもの心情を表現する教材が多くを占める。その中で、現代文学の著名な作家として最後に登場するのは、朱自清である。『語文』六年下第一単元「人生への啓示」第2課「匆匆」（忽忽）は、朱自清が1922年に発表した散文である。『語文』において、ここに至るまでの段階で取り上げられてきた教材が概ね幼年時代の思い出、大自然の姿や未知の世界との出会いを子どもの視点から描く作品であるのと異なり、過ぎ行く時間の様相を冷徹な視線でとらえ時間の持つ価値を探ろうとする作品で、小学校の最終段階に入った児童が徐々に青年へと成長していくことに対応した教材となっている。また、小学六年で「匆匆」を学ぶに至り、『語文』小学一年上冊で学習した李白「静夜思」が表現する、絶え間なく過ぎ行く「時」に対する観念と漸く一つの繋がりを得ると言える。

以上、『語文』の中で中国の現代文学に関する教材を概観したが、教材の特質という観点から以下のようにまとめられる。

第一に、中国の現代文学に基づく教材は、作品を通じて中国の国土景観を知ることが目標とする。老舎の「草原」並びに「北京的春节」はその代表である。蕭紅の「火烧云」巴金「鸟的天堂」、葉聖陶「记金华的双龙洞」も自然界を観察する姿勢は同じだが、子どもが初めて眼にした景観から自然の真の姿を発見するという視点が強調されている。

次に、中国の現代文学に関する教材には、作者の幼年時代の体験と、そこから如何なる人生観を形成したかを説くものが挙げられている。「冬陽・童年・骆驼队」と「祖父的园子」はいずれも作者が幼年期の記憶を家族との思い出を絡めて語る。「窃读记」と「落花生」も子どもを主人公に据える作品であるが、人間が生きていく上で必要となる精神を説く点で共通している。これらは子どもの姿を描いた作品、或いは子どもの視点から自然の景観や自分を取り巻く世界を描いた作品であるのに対し、六年下第2課

「匆匆」は、時の流れを主題に、瞬く間に過ぎ行く時間の尊さ、更には時間という観念を意識させる教材として載録されている。

Ⅳ 『語文』の中の外国文学

『語文』の中には中国文学の作品と同時に諸外国の文学作品が収められている。特に『語文』六年下第四単元は「外国文学」を主題とし、四つの作品を載録する。義務教育語文課程で外国文学を学ぶ目的は何か。教師用教学書によれば、この単元を学習する目的は、「第一に、学生の読書の幅を広げ、学生の理解力に適した外国の名作を閲読するべく指導すること。第二に、読書を通じて異なる国家の多様な文化を理解し、登場人物の運命に関心を注ぐこと。第三に、内容を理解する能力（特に全体の概要を把握する能力）を高め、作品中の登場人物の思想感情に共感する力を養うこと」³⁶とされる。

従って、同単元には原作の発表後、多様な言語に翻訳され世界中で親しまれている小説の中から、人物の行動と感情の表現に着目し、以下の四作品が選ばれている。

* 『語文』六年下第四単元「外国文学」所収の教材。

(括弧内は邦訳名、原作者及び発表年)

第14課「売火柴的小女孩」

(マッチ売りの少女 アンデルセン 1848年)

第15課「凡卡」

(ワーニカ チューホフ 1886年)

第16課「魯濱遜漂流記」

(ロビンソン漂流記 ダニエル・デフォー 1691年)

第17課「汤姆・索亚历险记」

(トム・ソーヤの冒険 マーク・トウェイン 1876年)

これを見れば、六年下第四単元「外国文学」所収の四つの教材には、十七世紀末から十九世紀にかけて、キリスト教文化圏で書かれた作品が選ばれていることが分かる。

ただし、『語文』には、この単元を学習する前に、多様な外国文学の作品が登場している。その中から現在各国で広く親しまれている主な作品を以下に示す。

* 『語文』一年上から六年上所収の外国文学に基づく教材と原作者及びその国籍。

二年下第28課「丑小鸭」

(醜いアヒルの子 アンデルセン デンマーク)

三年上第14課「蜜蜂」(蜜蜂 ファーブル フランス)

四年上第7課「蟋蟀的住宅」

(コオロギの家 ファーブル フランス)

四年上第9課「巨人的花园」

(巨人の花園 ワイルド イギリス)

四年上第23課「卡罗纳」(カローナ アミーチス イタリア)

四年上第11課「去年的树」(去年の木 新美南吉 日本)

五年上第10課「松鼠」(リス ビュフォン フランス)

五年下第24課「金钱的魔力」

(お金の魔力 マーク・トウェイン アメリカ)

五年下第26課「威尼斯的小艇」(ベニスのゴンドラ 同上)

六年上第9課「穷人」(貧しい人 トルストイ ロシア)

六年上第24課「金色的脚印」

(金色のあしあと 椋鳩十 日本)

外国文学の名作として最初に『語文』に登場するのは二年下第28課「丑小鸭」(醜いアヒルの子)で、原作者は言うまでもなく、『語文』六年下第

四単元所収の「売火柴の小女孩」と同じアンデルセン(1805~1875)である。「丑小鸭」は1843年に発表され、世界各国で親しまれている作品である。教師用教学書は、この教材の学習目標を「感情をこめて本文を朗読するとともに、他人を尊重し正しく自分を認識することを学ぶ」とし、小学二年の児童の理解力に沿って、作品を無理なく読むことが目標となっている。³⁷

「丑小鸭」を先頭に『語文』の中の外国文学の作品は、各学年に分散して配されている。三年上第四単元「こまやかな観察」第14課「蜜蜂」(蜜蜂)と四年上第7課「蟋蟀的住宅」(コオロギの家)は、フランスのフェーブル作『昆虫記』から³⁸抄訳されている。四年上第三単元「世界の童話」第9課「巨人的花園」(巨人の花園)³⁹は英国の作家ワイルドの作品、同第11課「去年的樹」(去年の木)⁴⁰の原作は、日本の新美南吉の作品である。また同冊第六単元「真心」第23課にアミーチス作「カロナ」(カローナ)が取り上げられているが、アミーチスは日本では「クオレ」「母を訪ねて三千里」の作者として知られるイタリアの文学者である。

五年上第三単元「説明文の学習」第10課「松鼠」(リス)は18世紀フランスの啓蒙思想家、博物学者でビュフォン(1707-1788)の著書『博物誌』(または『自然誌』)から抄訳されている。フランスの作家の作品は、フェーブルと併せ自然科学の分野から、作品が取り上げられていることになる。

五年下第七単元「作家が描く人物像」第24課「金銭的魔力」(お金の魔力)と同第八単元「異国の風景」第26課「威尼斯的小艇」(ベニス gondola)はいずれもアメリカの作家マーク・トウェイン(1835~1910)の作品で、小説と紀行文から各一作品が選ばれている。

六年上第三単元「心の歌」第9課「穷人」(貧しい人)⁴¹はロシアの作家トルストイ原作の作品、同第七単元「動物の世界」第24課に椋鳩十の作品として「金色的脚印」(金色の足跡)⁴²が載録されている。

このように、六年下第四単元「外国文学」を学習する前に、『語文』の中では、デンマーク、ロシア、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、

及び日本の文学作品を学習済みとなっている。

上記の学習を経て、『語文』六年下第四単元「外国文学」では何を学ぶのか。同単元の教材は、精読教材として第14課「売火柴の小女孩」⁴³（マッチ売りの少女）から始まる。アンデルセンの代表作の一つに数えられるこの作品は1848年に発表された後、多くの言語に翻訳され、今も世界中で親しまれている。文中には、貧しいマッチ売りの少女が、辛い思いを抱えてクリスマスを過ごした後、大晦日の晩に寒さと孤独に苛まれ僅かな暖かさを得るためにマッチを擦ると、その灯の中に現れた亡き祖母の幻にいざなわれて天上へと導かれる様が描かれる。この作品は、日本では概ね小学校低学年以下の子どもの為の童話とみなされているが、中国の語文課程ではこの作品を『語文』六年下冊に組み入れ、作品に反映されている作者の感情と創作上の意図を読み取るよう学習課題を掲げている。すなわち、教師用教学書には「作品中の登場人物の運命に関心を持ち、作者の思想感情を読み取ること」⁴⁴と有り、物語を鑑賞するだけでなく主人公の過酷な運命に関心を注ぐと共に、その原作者がアンデルセンであることを認識し、その思想と感情を理解することが求められている。⁴⁵

つづく第15課「凡カ」（ワーニカ）⁴⁶も精読教材で、1886年にチェーホフ（1860～1904）によって書かれた。チェーホフはトルストイと並んで19世紀ロシアを代表する作家であり、人間が日常生活の中で表わす何気無い行動の中に人生の意味を問う作風で知られ、その作品は世界各国で翻訳されている。魯迅もチェーホフの影響を受けてチェーホフ作品の翻訳も試みており、中国の現代文学とも関わりの深い作家である。

「凡カ」は、19世紀後半帝政時代ロシアの下層社会で、両親と死別した九歳の少年ワーニカが奉公先の親方家族から虐げられ孤独なクリスマスを過ごす姿を描く。教師用教学書はこの教材に、児童に外国の文学作品並びに外国文化への関心を促し、作者の思想感情を理解させると共に、登場人物の悲惨な運命に関心を抱かせるという目標を設定している。⁴⁷

既に拙稿で論じたが、「売火柴の小女孩」と「凡カ」はいずれも短編小説

で外国文学の作品を全文読了することによって読書について幅広い視野を養い、その表現方法を理解するという学習目標が掲げられている。⁴⁸ 物語の内容についても、この二つの作品はともに、19世紀キリスト教社会において最も大切に幸福に満ちた祝日であるクリスマスの時期に貧困と孤独に苦しむ子供を主人公とするが、『語文』六年下第三単元では、作者が作品の中で何を描こうとしたのかを考えさせる教材となっている。

一方、略読教材には精読教材とはまったく異なる作品が取り上げられる。すなわち、第16課「魯賓遜漂流記」⁴⁹（ロビンソン漂流記）と第17課「汤姆・索亚历险记」⁵⁰（トム・ソーヤーの冒険）はいずれも長編作品で、各課とも本文の前に原作の概要を示す。本文は、それぞれの作品の中から最も精彩に富む部分を抄録するが、教科書を通して作品への関心を高めた後、長編作品を全文読了する意欲を引き出すことが期待されている。⁵¹

第16課「魯賓遜漂流記」は1719年、イギリスの作家ダニエル・デフォー（1660～1731）によって発表された。原作では、乗船していた船が難破し、ただひとり無人島に流れ着いた主人公が、苦難を乗り越えて28年間を生き延び、ついに救助されて帰国するまでが語られる。

第16課の本文は、最初に原作の概要を示した後、物語のヤマ場の一つ、主人公が無人島漂着後、絶望の中から立ち上がり規律正しい生活を確立しようと決意する場面を取り上げる。教師用教学書は、この教材に「困難を恐れず力強く生き抜き、積極的で楽観的な、主人公の人生に対する態度を読み取る」⁵²という学習目標を掲げている。

「魯賓遜漂流記」の本文には、主人公が天涯孤独の身で無人島に流れ着き、その地で生きる覚悟を決めた後、キリスト教徒に相応しい生活を築き上げようと努力する様が綴られる。中国の語文課程においては、「売火柴の小女孩」及び「凡卡」に次いでこの教材からキリスト教文化の一端を提示する目的を持つ。

同じ冒険譚ではあるが、第17課「汤姆・索亚历险记」は「魯賓遜漂流記」とは異なる性格をもつ。「汤姆・索亚历险记」の原作は1876年、米国の作

家マーク・トウェイン(1835~1910)が発表した小説で、19世紀アメリカ中西部ミズーリ州ミシシッピー河畔の田舎町を舞台に、大人の目を盗んで悪戯に明け暮れる少年トム・ソーヤとその仲間たちの日常を描く。同課の本文も、最初に作品の概要を説明した後、物語の山場を抄出する。その場面の中で主人公トムと友人ベティは遊びに入った洞窟の中で出口を見失い窮地に陥るが、冷静に行動し無事に脱出を果たす。教師用教学書には、この教材の学習目標として「冒険心に富み、自由を追い求める主人公の性格を理解すること」⁵³とある。

本文はトムとベティが無事に洞窟を脱出するまでの経緯に重点が置かれるが、文中にはトムが周囲の大人たちに引けを取らず闊達に自分の考えを行動に移す様が、ミシシッピー河流域の情景を交えて描かれている。マーク・トウェインの代表作「汤姆・索亚历险记」の一節を読むことで、現在の中国とは時代も風土も異なるアメリカ中西部の子どもの冒険譚を知ると共に、現実の世界では許されない、物語の中の緊迫した空気と劇的な場面を体験し、読書への関心を促す目的をもつ。

『語文』の教材として、マーク・トウェインの作品は「汤姆・索亚历险记」の他に、5年下第七单元「作家が描く人物」所収の第24課「金銭的魔力」、同5年下第八单元「外国の風景」第26課「威尼斯的小艇」と併せ、外国人作家の中では最多となる合計3作品が収められている。これら三つの作品はそれぞれ性格が異なり、マーク・トウェインという作家を印象深く理解する手立てとなる。

この單元には「外国の多様な文化を学ぶ」という目標が掲げられているが、「売火柴的小女孩」と「凡卡」の物語は、中国の伝統とは異なるキリスト教社会に於いて、最も重要なクリスマスの行事を舞台に展開する。これにつづく「魯賓遜漂流記」は、18世紀前半の時期に海上貿易と世界経済に大きな影響力を及ぼしたイギリスの中産階級の価値観が色濃く反映する冒険譚である。本文からは主人公が無人島で生活を始めた後も、キリスト教徒としての習慣を重んじて生活を組み立てようとしたことが読み取れる。

これに対して、「汤姆·索亚历险记」も「鲁滨逊漂流记」と同じ冒険譚ではあるが、洞窟の中で遊ぶうちに、迷路に迷い込んだ主人公が勇気を以って行動し出口を見つける様を描く。本文は事件の経緯を劇的に伝えるが、これと同時に本文からは、主人公の少年トムが周囲の大人たちに対して臆すること無く自分の意志に従って行動する人物だと分かる。実生活では現実味の低い事態を19世紀米国の片田舎の少年の物語として鑑賞すると共に、マーク・トウェインの世界的名作の一端に触れ、読書への関心を高めることが、学習目標として、この教材に託されている。

おわりに

中国の小学校語文課程においては、外国の多様な文化を理解するために外国文学の名作を学ぶ。だが、幾多の外国文学の名作の中から、中国の語文教科書の教材となる作品をどのような観点によって選択するのか。この問題について、本稿では特に『語文』六年下第四単元「外国文学」に焦点を当てて考えてきた。

中国の義務教育語文課程には、多くの学習目標が課されている。その中では言うまでも無く、母語である中国語の言葉と文字の習得と文学作品の鑑賞が基本となるが、これ以外に中国及び中国と関係の深い国家地域の歴史地理と民俗文化を知ること、身近な科学現象を主題とする説明文への習熟、更には中国共産党及び党指導者に対する理解を深めることを目的とする教材が多数取り入れられ、教科書の中に載録できる外国文学の作品は限られている。

このような条件の下に、『語文』では各学年に外国文学の作品を分散し、各単元の主題に従って他の教材と組み合わせて学習した後、「外国文学」を主題に冠する六年下第四単元においてアンデルセン、チェーホフ、デフォー、マーク・トウェインの作品を学ぶ。これらの作品は17世紀末から19世紀にかけて、欧米のキリスト教社会で生まれた点で共通点を持つ。特に、「売火

柴の小女孩]、「凡卡」、「魯賓遜漂流記」は教材の中で直接キリスト教文化に触れており、作品間の関係が認められる。

この背景として、歴史的に中国は東アジア儒教文化圏の中心に位置してきたが、国際関係の緊密化が進むにつれ、中国とは異なる地域の多様な文化について知識を得ることが益々必要となっているという事情が有る。中でも世界の様々な分野で影響力を持つ、欧米を中心とするキリスト教文化圏の特色を知ることは重点項目の一つに数えられている。

この他にも、教材に対する学習者の理解を促すために、『語文』においては、教材間の連携が意識的に行われている。その一つとして、六年下第四単元「外国文学」所収の四つの教材の中で、「売火柴の小女孩」「凡卡」「汤姆・索亚历险记」は子どもを主人公とする「児童文学」の範疇から作品から選ばれている。教材の提示方法については、上記四つの教材の中で、アンデルセンの作品は二年次に「丑小鸭」を、マーク・トウェインについては五年次に「金銭的魔力」と「威尼斯の小艇」を既に学んでいる。これは、六年次にそれぞれの代表作「売火柴の小女孩」と「汤姆・索亚历险记」を深く学ぶに当たり、事前にそれぞれの作家に親しむための措置と言える。

「汤姆・索亚历险记」への理解を促すためには、この単元以外の教材との繋がりも考慮されている。すなわち「汤姆・索亚历险记」は鍾乳洞が物語の舞台になっているが、学習者は四年下第3課「记金华的双龙洞」を通じて鍾乳洞の特色を知り、これによって「汤姆・索亚历险记」が描く、鍾乳洞の中で迷子になった主人公トムの状況を理解する一助とする。

六年下第四単元の長編教材「汤姆・索亚历险记」と「魯賓遜漂流記」は共に主人公が困難な状況を脱出しようとする冒険譚であるが、これには五年下第20課「景阳冈」、同第21課「猴王出世」とも共通点が見出せる。さらに「魯賓遜漂流記」は冒険譚というだけでなく、苦難に見舞われた人間が如何に生きるべきか、一つの模範像を示す作品である。本文で述べたように、『語文』の中の中国文学を原作とする教材の中には、「将相和」に代表される人間の模範像を描く教材が多数取り上げられている。「魯賓遜漂

流記」はそれらとも共通する一面を備えている。

以上、『語文』六年下第四单元「外国文学」所収の教材を中心に、中国の小学校語文課程の中の外国文学に由来する教材について考察してきた。自国の伝統と異なる文化を理解すること、並びに外国文化の中に自国との共通点を見出すことは、各国に共通する課題である。本稿では、現在中国でキリスト教文化、冒険譚、苦難に直面する人間の模範像という視点から、外国文学の名作が選ばれ語文課程の教材に取り上げられていることを確認した。ただし、外国文学に関する教材の中で、日本文学をはじめ深く考察できなかった作品が多々ある。これらについては、稿を改めて考えたい。

-
- 1 拙稿「中国の国語教科書が描く自然・人間・社会—人民教育出版社『義務教育課程標準実験教科書 語文』四年級下冊を中心に」『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第49号2015年8月、同「中国の義務教育課程国語教科書の特色について—人民教育出版社刊『語文』六年級下冊を中心に—」『名古屋外国語大学外国語学部 紀要』第48号 2015年2月、同“Moral Norms China’s Elementary School Textbook of Language Yuwen Tells of”「国際シンポジウム 東アジアにおける犯罪と道徳」報告書(2013年度科学研究費補助金基盤研究(A)代表:富谷至)83-100頁2014年、同「中国の小学『語文』の教科書 愛国のための儀礼を支えるキーワード」富谷至編『東アジアにおける儀礼と刑罰』(明文舎印刷)129-170頁2011年参照。
 - 2 現在中国の小学校で最も広範に使われている語文教科書は、課程教育研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 語文』一～六年級全12冊(人民教育出版社発行 2001年から2006年に順次第1版発行)である。本稿は、この教科書を基礎資料とする。また、同教科書の教師教学用書として、課程教育研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 語文 教師教学用書』一～六年級全12冊(人民教育出版社2001～2006年順次第1版発行)が出版されており、併せて本稿の参照資料とする。
 - 3 中華人民共和国教育部「義務教育語文課程標準(2011年版)」第一部分(一)「課程標準の性質」。

- 4 前掲「語文課程標準」第三部分(三)「教材編集への提言」第三条。
- 5 前掲「語文課程標準」第三部分(三)「教材編集への提言」第二条。
- 6 人民教育出版社刊 課程教材研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著『義務教育課程標準実験教科書 語文』六年級下『教師教学用書』第四単元140～141頁。
- 7 『語文』五年級上第一単元 第1課「窃读记」(原作者:林海音)。
- 8 同上第2課「小苗与大树の对话」。
- 9 同上第3課「走遍天下书为伴侣」(原作者:Joan Aiken 英国)。
- 10 同上第4課「我的长生果」(原作者:葉文玲)。
- 11 前掲「走遍天下书为伴侣」9頁。
- 12 『語文』一年級上第6課「静夜思」(原作者:李白)。
- 13 同上第7課「小小的船」(原作者:葉聖陶)。
- 14 同上第8課「阳光」。
- 15 同上第9課「影子」。
- 16 『語文 教師教学用書』四年下第29課「寓言二則」二「教学目標」182頁。
- 17 『語文 教師教学用書』五年下151頁。
- 18 前掲『教師教学用書』五年下第18課「将相和」三「教学建議」157頁。
- 19 前掲『教師教学用書』五年下第19課「草船借箭」三「教学建議」168頁
- 20 前掲『教師教学用書』五年下第20課「景阳冈」一「教材読解」176頁。
- 21 同上第20課「景阳冈」二「教学目標」180頁。
- 22 『語文』五年下第20課「景阳冈」103頁。
- 23 『語文』五年下第21課「猴王出世」。
- 24 唐の高僧玄奘(600-664)は、当時中国では眼にすることが出来なかった仏典を学ぶため629年に国禁を冒して長安を出発、インドで修行の後16年間を経て645年に帰国した。この間に玄奘の大旅行の記録は『大唐西域記』にまとめられた。これに次いで玄奘没後の688年には玄奘の弟子慧立によって『大唐慈恩寺三蔵法師伝』が記された。後世、玄奘三蔵の数奇な旅行譚には庶民の関心が集まり、講談など語り物文芸の人気演目となった。南宋時代にはその代表的テキストとして『大唐三蔵取経詞話』が出版された。それ以降もこの物語は大幅な改編が進み、玄奘三蔵に代わって主人公に据えられた孫悟空が猪八戒、沙悟浄を従えて三蔵を助け妖怪・化身と闘う空想世界の冒険譚へと変貌を遂げ、明代に至って『西遊記』と呼ばれる作品となった。
- 25 『語文』六年上第五単元「魯迅」75～97頁。同単元所収の教材は第17課「少年

- 闰土」、第18課「我的伯父鲁迅先生」、第19課「一面」、第20課「有的人」。
- 26 『語文』 一年上第7課「小小的船」(原作者：葉聖陶)。
- 27 『語文』 三年下第3課「荷花」(原作者：葉聖陶)。
- 28 『語文』 四年上第6課「爬山虎的脚」(原作者：葉聖陶)。
- 29 『語文』 四年下第3課「记金华的双龙洞」(原作者：葉聖陶)。
- 30 『語文』 四年上第四单元「動物」所収第15課「猫」、第16課「母鸡」は、いずれも原作者は老舎。
- 31 『語文』 五年下第1課「草原」(原作者：老舎)。
- 32 『語文』 六年上第6課「北京的春节」(原作者：老舎)。
- 33 『語文』 には蕭紅の作品として、四年上第4課「火烧云」、五年下第7課「祖父的园子」が載録されている。
- 34 『語文』 には林海音の作品として、五年上 第1課林海音「窃读记」、五年下第6課「冬阳・童年・骆驼队」が載録されている。
- 35 『語文』 四年上第3課「鸟的天堂」(原作者：巴金)。
- 36 前掲『教師教学用書』六年下第四单元140～141頁。
- 37 前掲『教師教学用書』二年下第28課「丑小鸭」二「学習目標」162頁。
- 38 『語文』 三年上第14課「蜜蜂」。内容から判断し、『ファール昆虫記』の中でこの教材に該当するのは日本語版では山田吉彦・林達夫訳『完訳 ファール昆虫記(二)』(岩波文庫 1993年)七「ぬりはなばちの新しい研究」に、四年上第7課「蟋蟀の住宅」は同『完訳 ファール昆虫記(六)』十三「こおろぎ一住居と卵」に相当する。
- 39 『語文』 四年上第9課「巨人的花园」。原作はOSCAR WILDE “THE SELFISH GIANT”、本稿ではTHE WRITINGS OF OSCAR WILDE “A house of Pomegranantes The Happy Prince and other Tales”—A. R. KELLER CO. Inc所収を参照。
- 40 『語文』 四年上第11課「去年的树」、原作は新美南吉「去年の木」。『ごんぎつね 新美南吉童話作品集1』大日本図書等1988年等所収。
- 41 『語文』 六年上第9課「穷人」。
- 42 『語文』 六年上第24課「金色的脚印」、原作は椋鳩十「金色のあしあと」。『椋鳩十動物童話集 第8巻』(小峰書店 1990年)等所収。
- 43 『語文』 六年下第14課「卖火柴的小女孩」。
- 44 前掲『教師教学用書』六年下第14課「卖火柴的小女孩」二「教学目標」144頁。
- 45 前掲『教師教学用書』六年下第14課「卖火柴的小女孩」一「教材解説」142頁、144頁。

- ⁴⁶ この作品の日本語版は、本稿ではチェーホフ作・松下裕訳『子どもたち・曠野 他十篇』（岩波文庫 赤623-6 2009年）所収「ワーニカ」を参照。
- ⁴⁷ 前掲『教師教学用書』六年下第15課「凡卡」一「教材解説」152頁。
- ⁴⁸ 前掲「中国の義務教育課程国語教科書の特色について—人民教育出版社刊『語文』六年級下冊を中心に—」、関連資料は前掲『教師教学用書』六年下140頁参照。
- ⁴⁹ 前掲『語文』六年下第16課「魯濱遜漂流記」。
- ⁵⁰ 前掲『語文』六年下第17課「汤姆・索亚历险记」。
- ⁵¹ 前掲『語文』六年下79頁。
- ⁵² 前掲『教師教学用書』六年下第16課「魯濱遜漂流記」二「教学目标」166頁。
- ⁵³ 前掲『教師教学用書』六年下第17課「汤姆・索亚历险记」二「教学目标」177頁。